子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）
論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル：

Advanced maternal age elevates the prevalence of hypertensive disorders in women of Japanese, independent of blood pressure: a study from the Japan Environment and Children's study

和文タイトル：

年齢階層別、血圧と妊娠高血圧症候群との関連性の検討

ユニットセンター（UC）等名：甲信ユニットセンター（山梨）

サブユニットセンター（SUC）名：

発表雑誌名：Hypertension Research

年：2024　　DOI：10.1038/s41440-024-02019-5

筆頭著者名：内沼　裕幸

所属 UC 名：甲信ユニットセンター（山梨）

目的：

母体年齢が妊娠高血圧症候群の発症リスクになることが知られている。また、妊娠中の血圧が妊娠高血圧症候群の診断基準となる。一方で妊娠各時期の血圧と妊娠高血圧症候群のリスク、また母体年齢との関係は知られておらず、その関係性を解明する。

方法：

多胎妊娠の第二子以上と母体年齢のデータが不足している対象を除外した、100,949 名を対象とした。母体年齢が 35 歳未満を非高齢出産(73,535 名)、35 歳以上を高齢出産(27,414 名)の 2 郡に分けた。それぞれの群において、妊娠高血圧症候群を目的変数とし、共変量を各妊娠期の血圧、非妊娠時の BMI、出産歴、既往歴(高血圧症、糖尿病、甲状腺機能低下症)、妊娠糖尿病、妊娠中の体重変化、児の性別とし多変量ロジスティック解析を行った。

結果：

同じ血圧レベルであっても、妊娠高血圧症候群のリスクは 35 歳以上の女性の方が 35 歳未満の女性よりも高い傾向があった。妊娠初期と中期の血圧パターンでは、初期の血圧が高い場合、中期の血圧が同じであっても妊娠高血圧症候群を発症するリスクが有意に増加することが示された。また、35 歳以上の女性において血圧が 10mmHg 低値の場合に 35 歳未満の女性の妊娠高血圧症候群のリスクと同様であった。35 歳以上の女性では、妊娠初期の低い拡張期血圧と 60mmHg を超える脈圧によって妊娠高血圧症候群のリスクが有意に増加した。

考察（研究の限界を含める）：

本研究では、血圧が 2 つのグループ間で同等であったにもかかわらず、妊娠高血圧症候群の発生率は 35 歳以上の女性の方が有意に高かった。また妊娠の全期間において、35 歳以上の女性で血圧が約 10mmHg 低ければ、妊娠高血圧症候群のリスクは 35 歳未満の女性と同等だった。この研究の結果に基づくと、高齢出産の女性では、現在の基準よりも低い血圧の使用を基準として検討する必要がある。また、本研究では脈圧差が妊娠高血圧症候群のリスク評価に有用である可能性が示された。

本研究にはいくつかの限界がある。治療の有無は検討していない。また血圧に対する介入が実際に妊娠高血圧症候群の発症に及ぼす影響については不明である。

結論：

本研究は、妊娠高血圧症候群リスクを高める血圧レベルが各年齢層で異なることを示した。35 歳以上の女性では、血圧をより厳密に監視し、血圧レベルが低いときに介入する、35 歳未満の女性より 10 mmHg 低い血圧を目標にすることで、妊娠高血圧症候群のリスクを軽減できる可能性がある。